

令和 7 年 5 月 23 日

かづのグリーンエネルギー株式会社
代表取締役 佐藤邦治 様

日本野鳥の会秋田県支部
支部長 佐々木 均
秋田県横手市前郷一番町 1-21
(公印省略)

公益財団法人 日本野鳥の会
理事長 遠藤 孝一
東京都品川区西五反田 3-9-23 丸和ビル
(公印省略)

日本雁を保護する会
会長 呉地 正行
宮城県栗原市若柳川南南町 1 6
(公印省略)

(仮称) 鹿角東部市民ウインドファーム事業 環境影響評価方法書に対する意見

現在、縦覧中の「(仮称) 鹿角東部市民ウインドファーム事業 環境影響評価方法書」
に対し、鳥類及び生態系保全の立場から下記の意見を述べる。

記

対象事業実施区域（以下、計画地）は十和田八幡平国立公園の十和田八甲田地域と八幡平地域に挟まれた区域で、その大半は水源涵養保安林となっており、豊かな森林と清流に恵まれ人工物の殆どない環境である。また、計画地は「奥羽山脈緑の回廊」に隣接しており、東山鳥獣保護区、生物多様性の保全の鍵になる重要な地域（KBA）の「十和田」、さらにはカモシカ保護区域の「北奥羽山系」が含まれており、希少鳥類のみならず、多様な動植物が生息・生育している地域である。

日本野鳥の会秋田県支部・（公財）日本野鳥の会・日本雁を保護する会は、令和 6 年 8 月に本事業に係る計画段階環境配慮書に対する意見を発出し、計画地は絶滅の恐れが高いイヌワシ・クマタカ（ともに絶滅危惧ⅠＢ類・国内希少野生動植物種）の生息地であること、ハヤブサ（絶滅危惧Ⅱ類・国内希少野生動植物種）・ハイタカ（準絶滅危惧）をはじめとする複数の希少猛禽類の生息地であること、様々な鳥の生息地及び渡りの経路であることを理由に、当該計画の白紙撤回を求めたが、今回の方法書に対しても計画を白紙に戻すべきであるという意見に変更はない。特にイヌワシの保護・保全については全国的に喫緊の対策が求められており、イヌワシの生息に適した環境の揃っているこの地域は手つかずのまま保全すべきであると考え。また、現地調査自体がイヌワシの行動を阻害する要因となるため、方法書に基づく現地調査に着手することなく現段階で事業の計画を断念すべきである。

・イヌワシについて

ごく近年地元の観察者によって計画地そのものの上空においてイヌワシの飛翔が複数回確認されている。これらの状況から考えると、イヌワシが計画地付近に生息しており、計画地が生息の中心地となっている可能性が極めて高い。計画地で広い範囲を含む上沼牧野

跡は草地が広がる開放的な空間であり、イヌワシの重要な餌場としての要件を有している。また、計画地内および周辺の森林も落葉広葉樹林が多く含まれ、イヌワシの餌資源であるノウサギやヤマドリ等動物の生息地となっている。イヌワシの繁殖の継続のためには自然度の高い落葉広葉樹林や起伏の大きな地形の存在が重要であるとされており（注1）、この点で解放地、落葉広葉樹林帯及び起伏の大きな地形が併存する計画地周辺はまさにイヌワシ繁殖の成功要因が整った最優先で保全すべき場所である。

このような場所に風車を設置したり、環境改変工事を行ったりすることはイヌワシにとって重要な生息環境を破壊する行為であり、イヌワシ保護に大きく逆行する。影響軽減策と称して風車の位置を変更したり、基数を減らすなどの措置を行ったとしても、現時点より生息条件が悪化することは必至であり、繁殖率の低下にさらに拍車をかけることになる。イヌワシやクマタカといった生態系のアンブレラ種が確認された場合は、その周辺の環境を全体として保全することが重要であり、風力発電施設の候補地から外すべきである。

計画地におけるイヌワシの飛翔が複数回認められた以上、本種の生息・繁殖の阻害要因となる方法書に基づく現地調査を行うことなく、現時点で事業の継続は断念するべきである。

以下に貴社が事業を続行する場合に備えて方法書の記載内容についての意見を述べるが、ここでの意見は前述の立場に立った上で述べるものであり、準備書の段階に進むことを容認するものではない。

希少猛禽類調査

・調査自体が猛禽類の繁殖をかく乱・阻害する原因となり得るため、本来イヌワシの飛翔が確認された時点で調査は行うべきでない。調査を行う場合には、調査圧によって猛禽類の行動が通常時と変わり正確な行動圏の把握ができなくなることや繁殖放棄を誘引することを避けるために、「猛禽類保護の進め方(改訂版) — 特にイヌワシ、クマタカ、オオタカについて — (環境省、平成 24 年)」の内容に従って慎重に行うべきである。特に繁殖率が低下しているイヌワシには細心の注意が必要であり、イヌワシ調査に必要な知識と経験及び装備を有する調査員を採用するべきである。ただしイヌワシ調査に偏重するあまり他の猛禽類の調査がおろそかになることがあってはならない。

・方法書 394 ページ「表 6.2-2 (18) 調査、予測及び評価の手法(動物)」によると、希少猛禽類の調査を定点観察法で「繁殖期・非繁殖期各月 1 回実施する。なお繁殖期は 2 年間調査をする」と記されている。また一般鳥類の任意調査を冬季にも行うとも記されている。しかし、12 月から 3 月にかけては猛禽類の造巣期や抱卵期にあたり、この時期に個体にストレスを与えると繁殖そのものを中止する可能性が高いため、最大限の慎重な対応が求められる。先の「猛禽類保護の進め方(改訂版) — 特にイヌワシ、クマタカ、オオタカについて — (環境省、平成 24 年)」の内容に従って、この時期には高利用域には立ち入らない措置を取るべきであり、状況によって図 6.2-4 (5-1) で示された定点の位置を変更することを検討するべきである。

・高利用域にスノーモービル等で入ることは騒音による影響が考えられるため、避けるべきである。また、積雪期の調査には雪迷彩のブラインド等を用いるべきである。

・冬季の調査は吹雪などで調査が不可能になることもあるため、十分調査をできる時間と天候がどのくらいあったのか調査結果で明示するべきである。

・396 ページ「表 6.2-2 (20-1) 調査、予測及び評価の手法(動物)」において繁殖兆候を確認した箇所については繁殖行動に影響を与えない時期に踏査を実施し営巣地の有無を確認すると記されているが、幼鳥は巣立ってから 1 カ月程度親鳥の給餌を受けながら巣の周辺で生活するため、巣立ち後であってもこの時期は人の出入りを繰り返すような調査は避けるべきである。

渡り鳥調査

方法書によると貴社は渡り鳥調査を 3～5 月、9 月～11 月に行うとあるが、これではガン・ハクチョウ類の越冬期の動きを把握することができない。冬至が過ぎ、昼間の時間が長くなると鳥たちの脳下垂体が刺激され渡りの衝動が次第に高まり、暖かい日があるとそれが引き金となり渡りが行われることが知られている。近年は、冬期間の極端な気温上昇がきっかけとなり、宮城県で越冬中のガン類の多くが、中継地の秋田県まで移動した後、積雪のために再び宮城まで戻るという行動を繰り返すようになった。このような行動はこれまでの渡り調査では把握困難なので、新たな体制での調査を行うことが不可欠である。近年の傾向としてガン・ハクチョウ類の越冬地と中継地の往来は早い時には 1 月から始まり、2 月に最も活発になることが多く、特に積雪の少ない年にはこれが顕著となる。調査日程は宮城県及び岩手県におけるガン・ハクチョウ類の動向やその年の積雪状況を把握しながら臨機応変に設定し、必要とあれば 1 月や 2 月にも渡りの定点調査を行うべきである。ただし、レーダーを使う場合はイヌワシの飛翔・採餌・繁殖活動に影響を与えないよう十分に留意するべきである。

クマゲラについて

方法書 275 ページに配慮書時の専門家意見としてクマゲラ（絶滅危惧Ⅱ類）の調査が推奨されている。本州産クマゲラは激減しているが、最近発見された採餌の痕跡から、数は少ないながら生息していることは確かだとされている（出典：日本自然保護協会 2024 年 10 月 <https://www.nacsj.or.jp/2024/10/42122/>）ため、食痕の有無などを調査する意義はあると考える。ただし調査はクマゲラを脅かすことのないよう細心の注意を払うべきである。また、IC レコーダー利用を検討するべきである。

周辺道路について

貴社事業は風車設置予定地だけでなく周辺に大規模な作業用道路の設置が予定されており、改変部が非常に多い計画となっている。風車設置が鳥類への影響が大きいことは明らかであるが、風車を輸送できるような幅の広い道路の建設や拡幅工事、森林の伐採や擁壁等人工物の設置による大規模な改変を伴い、鳥類、ひいてはこの地域の生態系全体に影響を与えることは必至である。

特に風車設置予定地北側の周辺道路予定地の植生には「ブナクラス域自然植生」で自然植生度 9 のチシマザサ-ブナ群団、「ブナクラス域代替植生」で植生自然度 8 のブナ-ミズナラ群落などの自然林及び二次林がかなり多く含まれているが、貴社事業計画の道路はこれらの落葉広葉樹林を貫通し、分断する計画となっている。道路の拡幅や建設は工事中の人の出入りがイヌワシの・クマタカの繁殖に負の影響を与えるだけでなく、多量の樹木を伐採し森林を分断することで餌資源動物の生息に影響を与え、ひいては希少猛禽類の採餌環境にも影響を及ぼすことが懸念される。このような道路を建設しないと成立しない本事業は、イヌワシ・クマタカ保護の観点から見て無謀であり、容認することはできない。

なお、今回の意見書に記載されている内容等は省略することなく、原文のまま掲載することを希望する。

以上

注 1) 木本 祥太・板谷 浩男・長船 裕紀・守屋 年史・上野 裕介

「日本国内においてイヌワシが繁殖を継続するために必要な生息環境の要因の検討：全国スケールでの評価」 2024 年 12 月 保全生態学研究

https://www.jstage.jst.go.jp/article/hozen/advpub/0/advpub_2329/_pdf/-char/ja